HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈史料ノート〉石垣市立八重山博物館所蔵『沖縄教育』 : 『沖縄教育』復刻版第一巻補遺
Author(s)	近藤, 健一郎
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 134, 184(1)-171(14)
Issue Date	2019-06-27
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.134.184
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75107
Type	departmental bulletin paper
File Information	13-1882-1669-134.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第134号　2019年6月

〈史料ノート〉石垣市立八重山博物館所蔵『沖縄教育』——『沖縄教育』復刻版第一巻補遺

近藤健一郎*

【要旨】本稿は、二〇一二年に喜舎場永珣氏のご遺族から石垣市立八重山博物館に寄贈された喜舎場永珣資料に含まれていた『沖縄教育』第一号から第二一号（一九〇六～〇七年）のうち、『沖縄教育』復刻版第一巻（不二出版、二〇一二年）に採録できていなかった部分について、翻刻するとともに若干の解説を施したものである。喜舎場永珣資料の閲覧により、『沖縄教育』の当該号は、当時の印刷技法に応じて、現在考えられるような印刷の範囲外である欄外にも記事が続いている場合があり、その部分は『沖縄教育』復刻版では採録できていなかったことが判明した。本稿は、以上のような史料状況の進展をふまえて、『沖縄教育』復刻版の不十分な点を補うことを意図したものである。

【キーワード】
『沖縄教育』　喜舎場永珣資料　石垣市立八重山博物館

はじめに

『沖縄教育』を、二〇〇九年に不二出版より復刻開始してから十年の時が過ぎた。この『沖縄教育』復刻版は、当初計画であった全三六巻と別冊（解説・総目次・索引）を二〇一二年までの六回配本に分け刊行したのち、復刻開始時点では見いだせていなかったものを追加刊行し、現在第三九巻を刊行するに至っている。私もその復刻版の編集責任者の一人である。本稿は、この復刻版の既刊分を補足することを目的とした史料ノートである。

この『沖縄教育』という雑誌は、沖縄県の学務担当者や師範学校教員を指導者層とし小学校教員が会員の多くを占める沖縄県教育会（沖縄教育会）―日本全国の各府県や植民地等にも同様の組織が設けられていた―の機関誌である。それは、『琉球教育』等を前誌として、一九〇六年に第一号を刊行したのち、月刊あるいは隔月刊を原則としながら、現在見出しうる限りでは最終号である一九四四年の第三二八号まで、加えてその他の特別号も含めて、四十年弱の長期にわたり刊

*北海道大学大学院教育学研究院・准教授
DOI：10.14943/bedu.134.184

行され続けた[1]。

復刻開始後、たとえば上江洲均氏が復刻版第三六巻に収録された『島尻教育部会二五年記念誌』（一九一二年）から久米島に関連する部分を紹介しておられるように[2]、復刻版刊行にとどまらず、このような紹介等によって、狭義の教育史、琉球・沖縄史にとどまらない関心をお持ちの方々にも『沖縄教育』を目にする機会が増えていると推測できよう。一方で、そのようなことであればなおさら、復刻開始前からいだいていた不十分な状態での復刻版刊行ということを強く意識させられている。復刻版の別冊において、次のように記していた。「現存するのは全体の五割強にとどまり、全号を確認するまでにはいたっていない」[3]、「あたうかぎり周密な準備に努め、現実に確認できる原本はこれらを博捜のうえ底本を確定した。しかし、底本をすべて原本とすることは実現しなかった」[4]。言い換えれば、復刻にあたり『沖縄教育』を所蔵していることが確かなあるいはその可能性の考えられる機関や個人の所蔵を調査し、全号の所蔵確認をめざすとともに、複写あるいはマイクロの場合にはその基となっている雑誌原本を見いだそうとしたのであった。復刻版を刊行しようとすれば、対象となる全ての号を収集することは当然である。また、複写やマイクロ撮影の際の漏れは十分に予想されることであることや、複写等では充分に判読できない部分があることからも、原本を確認することは重要である。しかし所蔵の確認できない号が多かっただけでなく、複写は残されていながらも、その原本の所蔵が分からない場合は少なくなかった。それらの場合には未見のまま復刻版に収めることができず、あるいは複写物に依拠し、それを底本として復刻を行なわざるをえなかったのである。複写等に依拠した復刻版の程度を号数で示せば、特別号を含めて六四号分（所蔵館が撮影したマイクロのみを閲覧できたもの一八号分を含む）も含まれており、復刻版において復刻できたうちの四割弱にあたる[5]。

このようななかでとても心残りであったのが、『沖縄教育』第一号から第二一号（一九〇六～〇七年）であった。これらについては、琉球大学附属図書館と石垣市立図書館に複写本のみが残されており、原本を確認することはできなかった。そのため、復刻版第一巻は、前掲した二館にある複写を底本として復刻せざるをえなかった。とはいえ、その原本は喜舎場永珣氏が収集したものであり[6]、復刻しようとしていた時期にあっては喜舎場永珣氏の孫である喜舎場一隆氏が保存していると思われた。南島史学会を通じて個人的にも面識を得ていた私は、喜舎場一隆氏のご自宅に伺い閲覧の機会を得たものの、『沖縄教育』を見いだせないまま復刻版の刊行に至っていたのである。

二〇一二年三月に喜舎場一隆氏がお亡くなりになった後[7]、ご遺族は喜舎場永珣氏が収集し、子の永浩氏、孫の一隆氏と受け継いでいた膨大な史料を石垣市立八重山博物館に寄贈された[8]。その膨大な史料は「喜舎場永珣資料調査会」によって整理が進められ、二〇一八年三月には石垣市立八重山博物館の編集によって『喜舎場永珣資料調査報告書』が公表された。この報告書には、寄贈された二九三八点の資料のうち、永珣氏没後の一般書籍等を除いた二三八四点を九項目に大分類のうえ、解説を施し目録化している[9]。この報告書の恩恵にあずかりつつ、石垣市立八重山博物館において『沖縄教育』を閲覧させていただいた結果、予想されていたことではあったが[10]、復刻版第一巻では採録できていなかった部分を見いだすこととなった。そこで、本稿は、史料状況の進展をふまえ、復刻版第一巻において採録できていなかった部分を翻刻することにより、復刻版の不十分となった点を補うこととする。

一　翻刻の対象および対象部分について―喜舎場永珣資料のなかの『沖縄教育』

喜舎場永珣資料に含まれている『沖縄教育』の概要を、復刻版第一巻との比較によって整理することから始める。

喜舎場永珣資料には、二〇一三年に修復された『沖縄教育』が含まれている。『喜舎場永珣資料調査報告書』の目録（一一三頁）においては、所蔵されている号数が「一、二、六―二一」となっている。実際に閲覧し確認したところ、第一号（一九〇六年三月）から第二一号（一九〇七年一一月）までのうち、第三―五号および第一四号が欠本となっており、また第二二号以降が含まれていることもなかった。この所蔵状況は、『沖縄教育』復刻版第一巻と照合したところ、差異はなかった。さらに一面ずつ確認したところ、喜舎場永珣資料の第一八号の一、二面、第二一号の三―八面が欠落していた。これも『沖縄教育』復刻版第一巻と同じであった。

その他、喜舎場永珣資料には所蔵印などがある場合もあるのに対し、復刻版では全巻とも作成過程において刊行当時の状況を想定して不二出版が所蔵印や書き込みを削除しているという差異はある。また喜舎場永珣資料と復刻版第一巻には、紙面のかすれなどの差異も数ヶ所見られたが、これはおそらく保存過程での変化と考えられる。

このように、喜舎場永珣資料と復刻版第一巻に構成上の大きな差異はないことを確認することができた。

それでは、喜舎場永珣資料と復刻版第一巻とには、どこに差異があるのだろうか。

復刻版第一巻巻頭の最終頁下段に、次のように注記してある。

第一八号の一頁、二頁は、原本[11]において欠落している。また、八頁左隅に「以下欄外に続き」と記載され、四頁の欄外文字につづくものと推定される。

このように復刻版刊行の際の版下（印刷される原稿）となった前述した両館の複写本をよく読めば、すでに復刻できていない箇所があることが十分に予想されたのである。さらに、復刻版第一巻巻頭には注記されていないものの、同様に第一六号十面に「欄外に続く」、第一九号六面に「以下欄外に続く」とあった。

ところで、欄外にも記事が記載されているとはどういうことであろうか。復刻版の「解説」において次のように注記していた。

『沖縄教育』一号から二一号には、新聞形式の折り目に相当する誌面欄外に文字が散見される場合がある。同様の文字は『防長教育』十九号などの誌面においても確認できる。これらは頁をまたがるように印刷されており、原本を頁単位で複写した場合、判読がむずかしくなるか、複写されない場合さえ生じることになる。おそらく『沖縄教育』においても同様の印刷技法が適用された結果として、これらの解読困難な文字が現出していると推定できる。[12]

欄外にも記事があることについて、この記述を敷衍することにより示すこととしたい。

この時期の『沖縄教育』は、後のそれとは誌面の形状が異なり、新聞紙大であった[13]。八面だての場合、二枚の用紙にそれぞれ両面印刷がなされ、一枚目の右には一面と二面が、左には八面と七面がそれぞれ表裏に印刷される。したがって、片面だけを見れば、八面と一面、二面と七面が隣りあっていることになる（縦書きにあわせ、右側の面を先に記載した。以下、同様）。同じくもう一枚には、六面と三面、四面と五面とが隣りあうこととなる。そして、それらが折りたたまれ、組

まれることによって、新聞状の雑誌ができあがる。また十面だての場合には、上述したものの半分の大きさの用紙に五面と六面が表裏に印刷され、一枚目には十面と一面、二面と九面、もう一枚には八面と三面、四面と七面が隣りあい、それらが組まれて新聞状の雑誌となる。以上がこの時期の雑誌の形状である。

通常であれば折りたたまれることを前提として、読める範囲内に印刷がなされる。ただし、予定していた面数で記事が収まりきらないにもかかわらず、すべての記事をその号に掲載しようとした場合、上述のような『沖縄教育』の用紙および印刷技法に応じて、欄外に記事を掲載することとなる。それは、隣りあう二面と七面の間など、折りたたむと中央となる部分に印刷されたのである。それを当時の読者は容易に読むことができたが、後世になされた琉球大学附属図書館や石垣市立図書館の複写では、面ごとに撮影したために、欄外に掲載された部分が十分には撮影されず、複写本に収められていなかったのである。そして、当然ながら、それらを底本とした復刻版第一巻にも採録されないこととなった。

それでは、そのような箇所はどの程度あるのであろうか。それを一覧にして示せば、以下のとおりである。なお、段数は形式的なものを意味しており、全面あるいは半面の広告の場合を除き、各号とも四段である。

これらの箇所につき、以下において翻刻ならびに若干の解説を行ないたい。

＜表＞『沖縄教育』復刻版第一巻に採録されていない箇所一覧

号	発行年月	号の面数	掲載場所	掲載記事のつながり
第8号	1906年10月	8	2面と7面の間	7面2段目の会報から続いている。 （7面3・4段目および8面は広告）
第10号	1906年12月	8	4面と5面の間	7面最後の会報から続いている。
第11号	1907年1月	8	6面と3面の間	8面2段目途中の本会記事から続いている。 （8面2段目後半は法令、同3・4段目は会役職者の連名による新年のあいさつ）
第12号	1907年2月	8	4面と5面の間	6面4段目途中の会報から続いている。 （6面4段目後半は法令、7面と8面はともに全面広告）
第15号	1907年5月	8	4面と5面の間	記事のつながりはなく、欄外すべてが会報となっている。
第16号	1907年6月	10	4面と7面の間	10面2段目の会報から続いている。本文中に「（欄外に続く）」とある。 （10面3・4段目は広告）
第17号	1907年7月	8	4面と5面の間	記事のつながりはなく、欄外すべてが会報となっている。
第18号	1907年8月	8	4面と5面の間	8面最後の会報から続いている。本文中に「（以下欄外に続き）」とある。
第19号	1907年9月	8	6面と3面の間	6面最後の会報から続いている。本文中に「（以下欄外へ続く）」とある。 （7面と8面はともに全面広告）
第19号	1907年9月	8	4面と5面の間	6面と3面の間の欄外記事（会報）から続いている。一段目上部に、横書きで「（其の二）」とある。

二　『沖縄教育』復刻版第一巻に採録されていない部分の翻刻

（凡例）

一、翻刻の配列は、号数順どおりとした。同一の号の翻刻の場合は、内容上の順序によった。

二、それぞれについて、掲載号、刊行年月日、掲載場所を示したうえで翻刻を行なった。欄外記事も本文記事と同様に四段にわたっているため、段の変わり目を（一段目）のように示した後、次の行から翻刻の本文を掲げた。なお、翻刻の各行は欄外記事の各行のあり方に一致させた。

三、翻刻にあたり、読みやすさを考慮し、旧字体を新字体に改めた。明らかな誤記・誤植については、該当部分の右側に丸カッコで本来あるべき文字を記し、誤記が強く疑われるものについては同じ部分に丸カッコでママなどと記した。

四、判読不能な文字については、□で示した。（二箇所の□は、保存のための綴じ穴により、文字が欠けたものである。）

五、欄外記事の文字の大きさには大小があるが、翻刻ではその差異を設けず、同じ大きさで示した。各段において、各行の文字数が異なることがあるのはそのためである。

八号　一九〇六年一〇月一五日発行　（二面と七面の間）

（一段目）

●寄贈雑誌並書籍

小学校体操法解説壱冊（東京宝文館）国定準拠女子補習読本甲種上下（仝上）国定準拠補習作文甲種一冊乙種一冊（仝上）国定準拠女子補習読本乙種壱冊（仝上）改版高等日本公民読本全壱冊（仝上）国定教科書に見へたる家事教授資料（仝上）教育時論（七六九）愛媛教育雑誌（二三〇）理学界（四の三）教

（二段目）

育学術界（一三の七）教育研究（二九）函館教育会雑誌（一七三）茨城教育協会雑誌（一六八）滋賀県教育会雑誌（一五四）京都府教育会雑誌（一七一）越佐教育雑誌（一六四）台湾協会々報（九の四）教授日案の友（一の二）信濃教育会雑誌（二七八）大農園（団）（二〇四）長崎県教育雑誌（一六九）北海道教育雑誌（一六三）図書月報（四の一一）児童研究（九の八）

（三段目）

大分県教育雑誌（二五八）防長教育（八一）宮城県教育会雑誌（二二〇）北松教育雑誌（四の三）信濃教育会雑誌（二三九）愛知教育雑誌（二三二）

十号　一九〇六年一二月一五日発行　（四面と五面の間）

（一段目）

会　告

本会雑誌沖縄教育は会員諸君の研究実験にかゝる記述並に学説等教育上有益なる寄稿を歓迎す

一、原稿は一行二十二字詰にて階（楷）書にて認むるを要す

（二段目）

一、原稿には必ず本氏名を掲ぐるを要す但し特に匿名掲載を希望せらるゝ向は其旨を附記

し本氏名をも併記するを要す

明治三十九年十二月十五日

沖縄教育会

（三段目）

会　告

今十二月に於て本会会計整理の必要有之候処本会員にして会費滞納の方有之整理上差支候に付未納の方は本月二十二日迄に那覇区内は本会幹事宛に其他は各地方委員宛に皆納相成度右会員諸君に告ぐ

明治三十九年十二月十五日

沖縄教育会

十一号　一九〇七年一月一五日発行　（六面と三面の間）

（一段目）

●寄贈雑誌並書籍

教育時報(二〇)私立石川県教育会雑誌(四三)鹿児島教育(一五六)地学雑誌(一八ノ二一四)長崎県教育雑誌(一七一)学燈(九、十、十一)図書月報(五ノ一、二)兵庫県教育会報(二〇六、二〇七)教育界(六ノ一、二)教育学術界(一四ノ二、三)横浜市教育会雑誌(五八)函館教育会雑誌(一七四)家庭誤(絵)楽図画と子供(同文館)図画のけいこ(同文館)高知教育

（二段目）

(二三四、二三五、二三七)弘道(七六)日本の小学教師(八ノ九五、九六)国文学(八六、八七)教育公報(三一三)実験教育指針(五ノ一五、一六)教育(八〇、八一)三重県教育会報(一〇七、一〇八、一〇九)数学雑誌(五七、五八)北松教育雑誌(四五、四六)国学院雑誌(一二ノ一一)千葉教育雑誌(一七五)簿記世界(教科書)(八ノ十)教師用小学理科(元々堂書房)国定教科に於ける商業事項講義(元々堂書房)軍人後援新報(四六)音楽月刊(二三)郷土(同文館)北海道教育雑

（三段目）

誌(一六五、一六六)愛媛教育雑誌(二三二、二三三)滋賀県教育会雑誌(一五六、一五七)台湾教育会雑誌(五五、五六)愛知教育雑誌(二三四、二三五)東京教育雑誌(二〇一、二〇二)大農団(二〇六、二〇七)信濃教育会雑誌(二四一、二四二)防長教育(八五)大分教育雑誌(二六〇、二六一)島根県私立教育会雑誌(二三九、二四〇)宮城県教育雑誌(二一一、二一二)東京市教育会雑誌(二六、二七)日本教育(自七号至十七号)

十二号　一九〇七年二月一五日発行　（四面と五面の間）

（一段目）

●寄贈雑誌並書籍

簿記世界(八ノ一一、九ノ一)教育(八三)越佐教育雑誌(一六八、一六九)数学雑誌(五九)教育の実際

（一ノ三）弘道（一七八）日本の小学教師（九ノ九七）
教育公報（三一四、三一五）愛知教育雑誌（二三六）
防長教育（八六）東京市教育会雑誌（二八）茨城教育
協会雑誌（二七〇、二七一、二七二）教育界（二、三）

（二段目）

教育時論（七七五、七八三）松の樑（梁）（四六、四七）愛媛
教育雑誌（二三四）実験教育指針（五ノ一七）青森教育県教育（ママ）（六五、六六、一六、一七）宮城県教育会雑
誌（一二三、一二四）信濃教育会雑誌（一四三）教育
研究（三二、三三、三四）兵庫県教育会報（二〇八）北
海道教育雑誌（一六七）島根私立教育会雑誌（二四
一）□道（一五）高知教育（二三八、二四〇、二四一、

（三段目）

二四二）福島県教育（一三四、一三九）□士（三）小学
校（二ノ四）大分県教育雑誌（二六二、二六三）教育
時報（二一、二二）軍人後援新報（四七）福岡県教育
会々報（九六、九七）日本教育（一九．二〇、二一、二
二、二三、二四）理学界（五、六、七）児童研究（九ノ一
一、一二）図画教育（八二）教育（八二）石川県教育
会雑誌（四四）岡山教育会誌（七七）遠近法易解（四）

（四段目）

京都府教育会雑誌（一七四）躬行会業誌（叢）（三〇）教育
学術界（一四ノ四）大農図（団）（二〇八）東京教育雑誌
（二〇三）函館教育会雑誌（一七五）台湾教育会雑誌
（五七）国学院雑誌（一二）北松教育雑誌（四七）長崎
県教育雑誌（一七三）図書月報（五ノ三）国文学（八
八）千葉教育雑誌（一七六）滋賀県教育会雑誌（一五
八）宇院（ママ）教育（九）

十五号　一九〇七年五月一五日発行　（四面と五面の間）

（一段目）

会　報

◎雑誌編纂委員任命

会員富永実達君は本会雑誌編纂委員を嘱託せらる

◎会　員　異　動

○入会者　和泉氏安君　金城善助君　富永実達君

（二段目）

新坦（垣）良英君　宮城ウシ君

○退会者　塩田近太郎君　知念信義君

十六号　一九〇七年六月一五日発行　（四面と七面の間）

（一段目）

千葉喜作、高島茂平、叶（町）田則文、宮川武、
岡内清太、三好今三郎、片山敬太郎、曽根松
太郎、滝沢菊太郎、秋野太郎

～～～～～

●建　議　案

明治四十五年日本大博覧会を棒（ママ）とし万国教育大会
を東京市に開催するの件　（可決）
（理由）明治三十七八年の戦役は我が帝国の位置を
進めて世界一等国の斑に列せしむるに至れり此の

（二段目）
際万国教育大会を開催するは帝国教育の真価を世界に紹介し又世界教育者の風手（ママ）言論によりて帝国教育者心田を発拓し延て帝国教育上又世界教育上に多大の貢献あるべきを疑はずこれ本案を提出したる所以なり而して実行上の方法に至ては一切之を帝国教育会東京府教育会東京市教育会に托せんと欲す
右建議候也

（三段目）
右提出者　曽根松太郎、御園生金太郎
右賛成者
町田則文、郷野基厚、露口悦太郎
相沢英二郎、滝沢菊太郎、山本滝之助
松山伝十郎、日下部三之助、多田房之輔
千葉喜作、井上守久、大城戸宗重
根本正、湯本武比古、水野浩
岡村増太郎、藤井帰一郎、岡野代忠

（四段目）
岡村正義、井本為熊、谷井磯太郎
近藤辰郎、三好今三郎、広田叔郎
塩川佃、宇都宮喜六、伊藤幾太
富田武馬、日比野健一、長尾千尋
橋本岩記

十七号　一九〇七年七月一五日発行　（四面と五面の間）

（一段目）
会　報

●雑誌編纂（纂）委員会
一、明治四十年六月一日本会事務所に於て沖縄教育第十六号編纂委員会を午後一時より開会し中城、富永、山口、野間、本松の五編纂委員出席せり

（二段目）
二、明治四十年七月二日午后一時より本会事務所内に於て沖縄教育第十七号編纂委員会開会、編纂委員西村、樺山、富永、秦、山口、池内、大山の七名出席せり
～～～～～～～～

●代議員の報告
曩に三重県に於て開会せし全国聯合教育会に出席したる本会派遣の代議員本山、高橋の両氏は去月

（三段目）
相前後して帰県せしが同会々議に関する詳細なる報告書を両氏より提出せり
～～～～～～～～～～

●会　員　異　動
入会者　檳川信秀君
退会者　長井利裏君　高良郎作君　座喜味朝好君
篠原一二君　池間徳正君　勝連盛章君　宮里春仁君　牧野イサミ君

十八号　一九〇七年八月一五日発行　（四面と五面の間）

（一段目）

雑誌編纂委員会　　欄内より続く

明治四十年八月一日（木曜日）午前八時より本会事務所内に於て沖縄教育第十八号編纂委員会開会編纂委員西村、富永、中城、本松、樺山、奏(委)、山口、野間、大山の九編纂委員出席せり

入会者

高良長包君(宮カ)　喜屋武松次郎君　比嘉徳君

（二段目）

太外元君　比嘉信保君　島袋武八郎君

比嘉盛業君

退会者

松堂舒信君　藤井常登君　比嘉蒲長君

旭藤吉君　加藤タイ君　玉城五百吉君

宮田光君　泉常五郎君　弘中テイ君

新垣信永君　真境名元憲君

十九号　一九〇七年九月一五日発行　（六面と三面の間）

（一段目）

欄内より承く（其一）

支出の部に於ては前記会費収入増加額と同額を事業費増加説雑費増加説予備費増加説等ありしか右収入増額は不確定の収入なるを以て予備費に増加する説多数にて可決せり即ち予算案は収入の部会費収入と支出の部予備費に修正を加へて原案可決確定せり次に左の議案提出せられたり

議案

一、本県小学校に関する規程第十五条第一項第

（二段目）

一号の夏季休業日を延長する必要なきか可とせば知事に建議すること

二、小学校と中等程度の諸学校と連絡を計る為毎年一回以上学校長会を開かんことを知事に連議(建)すること

三、社会教育上娼妓の廓外に出づることを禁止せられんことを知事に建議すること

右建議す

提出者　池内徳蔵君　市川敬夫君

（三段目）

松田賀澤君

賛成者　本松虎之助君　樺山純一君

臼井勝之助君　石川拾兎喜君

富永実達君　管(菅)野喜久治君

祖慶実福君　渡嘉敷唯功君

大見謝恒有君　安里普待君

真栄城秀厚君　親泊朝擢君

富名腰義珍君　田仲康仁君

阿波連本堅君

（四段目）

右議案第一は廃案となり第二及第三は原案通り其筋に建議することに満場一致を以て可決之れにて

議事を終はり引続き会員演説に移りたり
第一席演題　露の音　　会員　親泊朝擢君
第二席演題　発句の話　　会員　本松虎之助君
第三席演題　中等程度実業教育の目的に就て
　　会員　岩井亀治君
右了て休憩（ママ）昼食午后一時再び開会奈良原本会総裁の挨拶ありて来賓演説となれり

同じく一九号（四面と五面の間。一段目上部に横書きで「（其の二）」とある。）

（一段目）
第一席演題　肺結核に就て　　金城医学士
第二席演題　民法第一条　　大塚法学士
第三席演題　数理と文明　　徳田工学士
第四席演題　郷土史に就ての意見（卑カ）　伊波文学士
右にて第二十一回総会を了へ西村副会長の挨拶ありて閉会を告けしは午后五時
八月三十一日編纂委員野間清治君東京帝国大学法科大学書記に就任の為退会に付左の感謝状及物品を贈与せり

（二段目）
感謝状
貴君明治三十九年十月以降本会雑誌編纂委員として尽力不尠因て茲に琉球紺飛白壱反を呈し聊か感謝の意を表す
明治四十年八月三十一日
沖縄教育会総裁男爵奈良原繁
野間清治君

（三段目）
八月三十一日会員滝口文夫君本会雑誌編纂委員を嘱託せらる
●会員異動
入会者　滝口文夫君
退会者　真栄城喜教君　島袋盛政君
　　野間清治君　福山清亮君
　　当間重禄君
●雑誌編纂委員会

（四段目）
明治四十年九月二日（月曜日）午前八時より本会事務所に於て沖縄教育第十九号の編纂委員会開会編纂委員樺山、富永、池内、山口、秦、仲本、大山、滝口の八名出席せり

三　翻刻記事に関する形式と内容

ここまでに翻刻した記事の形式と内容について若干の補足を行ないたい。

（一）　形式

まず、欄外に掲載されているのは、寄贈雑誌並書籍や会員異動など、すべて会報に含まれるものであった。寄贈雑誌等が通常の欄内に掲載されていることもあるので、欄外に置かれているからといって、会報

のなかの軽い内容というわけでは決してない。あくまでも、欄外に置くことは欄内に収まりきらなかった場合の措置であった。

しかし同時に、八面だての第一二号で、六面四段目中盤において会報のなかの会員異動で欄内の記事を中断し、六面四段目後半には法令を置いたように、法令を欄外に掲載することはなかったことも指摘しておきたい。この号の七面、八面には全面広告が置かれており、紙幅の関係から当然とはいえ、広告についても欄外に置かれることはなかったことを確認しておく。その意味では、欄内に掲載すべき記事と欄外になったとしても支障ない記事という差異はあったのである。

（二）　内容

このたび日の目を見た欄外記事は、すべて会報のため、この記事によって近代沖縄（教育）史上の何かを明らかにすることに直接つながるようなものは含まれていない。それでも、沖縄教育会の運営等にかかわって、次のようなことが指摘できる。

第一に、第一〇号に寄稿を求める「会告」が掲載されていたことである。この記事は、『沖縄教育』において寄稿を求めるものとして現時点で知りうる最も古い記事となる。これまで寄稿を求める記事は、第二〇号七面（一九〇七年一〇月）に掲載されていた「会告」であったからである。なお、この第一〇号と第二〇号の二つの「会告」は、第一〇号の三行目では「有益なる」が第二〇号では「利益なる」、第一〇号四行目では「二十二字詰」が第二〇号では「二十二字結」となっている誤植と思われる差異のほかは、まったくの同文であった。このような募集に基づく投稿がどれだけあったのかは不明であるが、『沖縄教育』の初期にあって会員向けに寄稿を求めていたことは記しておく必要がある[14]。

第二に、寄贈された雑誌や書籍の紹介は、第八号、一一号、一二号にも掲載されていたことである。すでに復刻されていた記事とあわせて、第一号から第一二号まで寄贈雑誌等の記事が継続して掲載されたのち、しばらく掲載されなくなった。少なくとも第一三号から第二一号では確認できず、現時点で次に確認できるのは第四五号（一九一〇年一月）となる。それらにより、『沖縄教育』が体裁の見本とした『防長教育』は、『沖縄教育』そのものが欠けている部分に掲載されていたであろうものを除けば、第六九号から第八六号まで（ただし、第八三、八四号については寄贈されたとの記事がない）継続して寄贈されていたことがわかる。なお、『沖縄教育』第一九号には「睡眠と長寿との関係」という記事が『防長教育』から転載されている。

第三に、教員等となったり、辞めたりを意味していることが多いであろう、会員異動の情報がやや増えたことである。たとえば野間清治の場合、すでに復刻されていた『沖縄教育』の記事から整理すれば、一九〇六年八月の教育会総会での評議員選挙で当選とはならなかったものの少なくない票を得ていたこと、同年一〇月に雑誌編纂委員となったのち、一九〇七年三月に沖縄県視学となり、同年八月の教育会総会において評議員に選出されていたことがわかるものの、その後の情報は『沖縄教育』からは得られなかった。ここで翻刻した第一九号の記事によって、野間は評議員に選出された半月後の八月三一日に東京帝国大学法科大学書記に就くために退会するとともに、雑誌編纂委員としての尽力に対し感謝状と琉球紺飛白一反が贈られていたことがわかった。もっとも野間の場合は、中等教育教員であり、県視学ともなったため情報がとても得やすいのであり[15]、第一五号に入会者として名前があがっている金城善助のように、『沖縄教育』では初出、少なくとも署名記事は執筆していない人物は少なくない。

第四に、第一九号の欄外記事によって一九〇七年八月に開催された第二一回沖縄教育会総会の様子のほか、雑誌編纂委員会について第一五号での委員任命、第一六号から一九号の編纂委員会の開催状況など、会の運営状況についてわかる記事がいくつか得られたことである。なお、第二一回沖縄教育会総会での伊波普猷の講演はのちに『琉球史の趨勢』として出版されることになるよく知られたものであるが[16]、講演を行なった場の機関誌である『沖縄教育』によってその講演がなされたことを裏付ける史料となると目される。

おわりに

本稿では、喜舎場永珣資料を閲覧することを通じて、以上のように『沖縄教育』復刻版第一巻で採録できていなかった部分について、若干の解説とともに翻刻を行なった。

最後に、本稿および喜舎場永珣資料に関連して二点補足しておきたい。

第一に、喜舎場永珣資料のなかに『沖縄教育　学制頒布五十年記念号』（一九二二年）も含まれていたことについてである[17]。同号についても、復刻版刊行時点においては、那覇市歴史博物館所蔵の複写本に依っていた。複写本の原本は書き込み等の状況から喜舎場永珣資料ではないと思われるが、新たに翻刻等により紹介する必要のある部分を含んでいなかった[18]。それでも原本を閲覧できるようになることは望ましいことである。

第二に、喜舎場永珣資料は、『喜舎場永珣資料調査報告書』の各解説も指摘しているように、きわめて豊富な、そして今後も継続して検討すべき史料群と思われることである。その概要を述べることは避け、報告書に委ねたいが、狭義の近代沖縄教育史に限っても、報告書ではスクラップブックに分類されている『昭和十年二月　与那国校編纂　天蛇の秘話』など、課題に応じて調査すべきものを多く含んでいる。そのような調査研究は今後を期したい。

（謝辞）

① このたびの喜舎場永珣資料に含まれる『沖縄教育』などの閲覧ならびにこの史料紹介に際し、石垣市立八重山博物館、同館学芸員寄川和彦氏に、たいへんお世話になりました。記して感謝申し上げます。

② 石垣市立八重山博物館での最初の調査において、『沖縄教育』の閲覧を藤澤健一氏とともに行なった。また「おわりに」でも言及したように、『沖縄教育　学制頒布五十年記念号』について、喜舎場永珣資料と那覇市歴史博物館の照合は藤澤健一氏が行なった。これらのことを明記しておきたい。なお、藤澤健一氏は、『沖縄教育』復刻版の編集責任者代表である。

（注）

1 詳しくは、藤澤健一・近藤健一郎「解説」、『沖縄教育』解説・総目次・索引、不二出版、二〇〇九年を参照されたい。なお組織名称にかかわり、一九一五年の臨時総会において、社団法人沖縄教育会を解散し沖縄県教育会を設立することが可決され、それに基づき、沖縄教育会から沖縄県教育会に改組・組織名変更がなされている。

2 上江洲均『おきなわの民俗探訪』榕樹書林、二〇一八年、一九八～二〇六頁。

初出は『久米島博物館紀要』第一四号、二〇一四年、七〇～七五頁。なお初出時には五項目が紹介されているが、著書ではそのうちの三項目の紹介となっている。

3 前掲、藤澤健一・近藤健一郎「解説」、八頁。引用部分の執筆は藤澤。

4 同上、二九頁。引用部分の執筆は藤澤。

5 詳しくは、「附表Ⅲ」、前掲『沖縄教育』解説・総目次・索引、二二八～二三七頁を参照されたい。

6 喜舎場永珣氏の経歴や業績等については、『甘きいずみ―喜舎場永珣生誕百年記念誌』喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会、一九九一年などを参照されたい。

7 下川晃義「喜舎場一隆会長の御逝去を悼む」、南島史学会『南島史学』第七九・八〇合併号、二〇一三年、一～三頁。

8 「開館四〇周年を祝う」、『八重山毎日新聞』二〇一二年一〇月一八日付。

9 石垣市立八重山博物館編『喜舎場永珣資料調査報告書』石垣市教育委員会発行、二〇一八年。

10 前掲、藤澤健一・近藤健一郎「解説」、三〇～三一頁。引用部分の執筆は藤澤。この点は、本稿本文において再論する。

11 本稿と同様に原本を「同時代に刊行されたもの」の意味で用いるのであれば、ここは原本ではなく底本（復刻版刊行の際の版下とするもの）と表記すべきものである。

12 前掲、藤澤健一・近藤健一郎「解説」、三〇～三一頁。引用部分の執筆は藤澤。

13 それゆえ、本稿では「頁」ではなく「面」と表記する。なお、前掲『喜舎場永珣資料調査報告書』の目録（一一三頁）において、『沖縄教育』第一号から第二一号を新聞の分類に組み入れているのも、形状からすれば自然なことであると思われる。

14 この寄稿を求める記事の少し後の『沖縄教育』にかかわって、照屋信治は、親泊朝擢が編集を行なっていた第六〇号から一〇二号（一九一一～一五年）の特徴として、沖縄人執筆者の多さや、小学校教師の執筆者が目立つことを指摘していることを想起しておきたい（照屋『近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方』溪水社、二〇一四年、一四三～一四五頁）。「会告」としての寄稿を求めることは、照屋の指摘するような、のちの特徴にどのようにつながっていくのか、あるいはつながらないのかは、今後の検討すべき価値ある点と思われる。

15 野間清治が東京帝国大学書記となることについては、中村孝也『野間清治伝』野間清治伝記編纂会、一九四四年、二九一～二九六頁などによって、すでに知られている。

16 外間守善・比屋根照夫編「年譜」、『伊波普猷全集』第十一巻、平凡社、一九七六年、五四一～五四二頁。

17 前掲『喜舎場永珣資料調査報告書』八九頁。

18 喜舎場永珣資料の原本と、那覇市歴史博物館所蔵の複写本との照合は、藤澤健一氏による。このことを記して感謝したい。

Notice on “OKINAWA KYOUIKU” published by Okinawa Educational Society in 1906-07 included in the collection of Eijun KISYABA

Kenichiro KONDO

Keyword

“OKINAWA KYOUIKU”, the collection of Eijun KISYABA, Ishigaki civic Yaeyama Museum

Abstract

The survivor of Eijun KISYABA (1885-1972) who researched Yaeyama area deeply donated his collection to Ishigaki civic Yaeyama Museum in 2012.

This paper notice unrecorded part of reprinted edition “OKINAWA KYOUIKU” vol.1 published by Fuji Shuppan in 2012. That part was found in the collection of Eijun KISYABA. That was written in the margin of “OKINAWA KYOUIKU” no.1-21 published by Okinawa Educational Society in 1906-07.